ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

「やぁ、友絆。おはよう」

　月曜日。雨が窓を打ち付ける音が薄らと響く中、俺が自分の席に近づくと、隣の席の生徒、日ノ下海斗が挨拶をしてきた。相変わらず、一人で布製の青いカバーのかけられた本を読んでいた。俺は、右手を挙げただけでそれに応え、席に座る。それにしても、まだ会って二日目で、もう下の名前を呼び捨てにされるとは思わなかった。こいつ、なんか馴れ馴れしい奴だな。

「友絆は、休みの日は何していたの？」

「特に言うほどのことは無いな」

　そう言いつつも、俺は土曜日に買ってきた物を、鞄から引っ張り出す。

「……あっ、それ！」

　驚きながらも、どこか嬉しそうな色のある声を、日ノ下は出す。ビンゴだ。

「友絆も、そういう本を読むんだ。僕も割と読むんだよね。これ、新刊？」

　こういう反応を返してくれたら、こちらも探した甲斐があるというものだ。いや、探したというよりは、レジに持っていくのに苦労した甲斐があった、というべきだろう。

　俺が持ってきた本は、表紙に可愛い女の子のイラストが書かれた、世間一般では『ライトノベル』と呼ばれている本である。

　心の中でホッと一息付き、俺は口を開く。

「ああ。先週発売されたやつ。難なら貸そうか？　俺、もう読んだからさ」

「本当？　じゃあ、代わりにこれ貸すよ。僕のオススメ」

　そう言って日ノ下は、さっきまで自分が読んでいた本を俺に差し出す。受け取りかけた俺の手が、一瞬止まった。

「大丈夫。これ一巻だから」

　そんな俺をどう思ったのか、やや微笑しながら、日ノ下は言う。俺は声にならない声で曖昧に返事をしつつ、それを受け取った。

　受け取った以上、読まない訳にはいかないので、俺は仕方なく本を開く。挿絵的に、これはラブコメだろう。まさか、自分も借りることになるとは思わなかった。正直な話、俺自身は、こういうジャンルの本より、教科書に載るような本の方が好きなのだ。

「どう、面白い？」

　日ノ下が喜々として聞いてくるが、まだ半ページも読んでないのに、分かるわけが無い。

「……落ち着け。まだそんなに読んでない」

「じゃ、じゃあ、来週までに感想聞かせて。気に入ってくれたら、続編持ってくるから！」

　……面倒な宿題が、一つ出た。

「で、どう思う？」

　この日の昼休み。俺は樹葉を教室の隅に引っ張って、今も机で本を読んでいる日ノ下をこっそりと指差し、小さな声で聞く。

「……うーん、どうだろう？」

　頭のアホ毛をピョコピョコ可愛く揺らしながら、樹葉は首を傾げる。

「あいつは、かなり怪しいと思うんだ」

　観察して二日目の時点で、俺はそう感じていた。例えば今日の授業中、俺は日ノ下の視線を感じることがあったのだ。入学式の時もそうである。

「私は、そうは感じない……かな。友絆は、どこら辺が怪しいって感じたの？」

「……俺のことを観察している気がする」

　どうも日ノ下を怪しいとは感じられないらしい樹葉に、俺は自分が思ったことを率直に言った。

「隣の席……だからじゃない？」

「授業中だけなら、俺もそうだと思う。でも、あいつは入学式でも、俺を見ていたんだ。あの時のあいつと俺の席は、たしか二メートルは離れていたはずだ」

「う……うーん……？」

　まだ日ノ下の怪しさに気づけない樹葉は、そう唸りながら首を傾げる。いったい、何が納得出来ないというのだろうか。

「疑うには、まだそれだけの材料が揃ってない気がする……まだ、報告するには早いんじゃないかな？　一応、私も注意してみるけど……」

「……まぁ、いいか。じゃあ、頼む」

　もうすぐ昼休みも終わる時間なので、俺はそう言って、自分の席へと向かう。後ろから困ったように溜息を吐く音が聞こえた気がしたが、俺が何かと振り向いた時にはもう、樹葉は教室を出て行くところだった。

「……あいつ、疲れているのか？」

　あの溜息は、間違いなく樹葉のものだ。もう二年以上も一緒に暮らしているので、今更聞き間違えるはずがない。俺が思っている以上に、任務を真剣に遂行しているのだろうか？　日ノ下の怪しさには気づけていないみたいだが、もしかして、口には出さないだけで、樹葉も何か思うところがあったのかもしれない。それか、自分も怪しい奴を見つけて、そっちの方が気になってしょうがない、とかか？　ひょっとすると、学校生活を楽しんでいるように見えて、神経をすり減らしているのかも。だとすると、俺は先週、樹葉に少し強い口調で「任務の遂行が～」なんて言ってしまったが……

「……謝っておくか」

　俺のその呟きと、授業開始を告げるチャイムの音が重なった。

「あれ、ロラン？　どうしたの？」

　その日の夕方、一人キッチンに立つ俺の姿を見て、樹葉の声がちょっと上ずる。

　どうもこうも、俺が白と黒のチェック模様のエプロンをつけてキッチンに立っている時は、やっていることは一つだ。

「夕飯、作っているんだよ」

「で、でも、今日はロランの当番じゃ……っていうか、今日は私の当番で……」

「お前は今日は休めよ。疲れているだろう？」

　怪訝な顔で樹葉は首を横に振るが、俺は構わず鍋に野菜を放り込む。後は蓋をして、煮込めば完成だ。だが、恐る恐るといった様子で、樹葉は蓋を開けて、銀色の鍋を覗き込んだ。そして、暫くそのまま見つめていたが、キッチンから薄ら差し込む夕日を顔に受けながら、俺を見上げた。手に持った蓋は、空中に固まったままだ。

「……どうした？」

「ロラン……これは？」

「これは何かと問われれば、見ての通りクリームシチューだが……」

　俺も鍋を覗き込む。色は問題ないし、何か変なものが入っているわけでもない。念のため味見もしたが、不味くは無かったはずだ。

　ジッと見つめる樹葉に緊張しながら、俺はもう一度、お玉でクリーム色のスープをい、すする。

「……まぁまぁじゃないか？」

　ゆっくりと液体を口の中で転がし、味を確かめた俺は、そう呟いた。不味いどころか、俺の最高傑作と言っても過言ではない出来だ。つい謙遜して「まあまあ」なんて言ってしまったが、自信を持って「超うまい」と言っても良かったと思う。いや、樹葉や詠の料理に比べれば、まだまだと言ったところだが。

「えっと……そっちは美味しいと思う」

　それについては樹葉も異論は無いようだ。だが、樹葉は首を横に振り、申し訳なさそうな声が次いで出た。

「そっちじゃなくて……あの、私が見た時、ロランは野菜を鍋に入れていたよね？」

「ん？　ああ、そうだな……って、それがどうした？」

「え……っと、もしかしてロランは、いつもこんな感じで作っているの？　クリームシチューだけじゃなくて、カレーとかも」

　俺は頷く。まぁカレーみたいに、具に肉が入るときは、先に火を通してからルーを作るが。今回のクリームシチューには肉系の具材は入っていないので、いつも通りルーを先に作ってから、野菜を煮込んでいる。

　これが普通だと思っている俺なのだが、困ったような顔で何かを言おうとしている樹葉を見ていると、えも言われぬ不安がこみ上がってきた。

「なぁ、どうしたんだ？　はっきり言えよ」

　樹葉的に、俺のやり方に問題があるのは明らかなのだろう。申し訳なさそうな顔で目を白黒させている彼女を見れば、それくらいの予想は俺にもつく。

　多分、俺をなるべく傷つけないように言葉を慎重に頭の中で組み立てているのだろうが、当の俺からしてみれば、入学式の日の朝の時みたいに、ズバッと言って貰った方がスッキリする。

「え……っと、じゃあゴメン」

　一度そう謝ると、樹葉はコホンと一つ咳払いをする。そして、クリーム色の液体を指差した。

「あ……あのねロラン。クリームシチューとかカレーって、ルーの前に、最初に具材に火を通してから作んないとなのね」

「……え？」

　ポカンと開いた口からそんな声が漏れて、俺は目をパチクリとさせる。

「で……でも、結局最後は煮込んで完成だろ？　それだと、野菜に火が通り過ぎちゃわないか？」

「そんなことないよ」

　微笑を浮かべてそう言った樹葉は、キッチンの入口に掛かっている、黄緑色のエプロンをとって身につけた後、新しい鍋を取り出す。

「さっき具材を入れたばかりだよね。じゃあ、ロラン。一旦、鍋を火からはずしてくれる？　こっちの鍋に、ホワイトソースだけ入れるから」

「あ……ああ。でも、どうするつもりだ？」

　そう言って、俺は鍋の中を覗く。もう既に、具材を中に入れてしまった。ここからルーだけ取り除くなど……

「大丈夫。取り敢えず、こっちの鍋にあけちゃって。中身全部入れるような感じで。あっ、でもゆっくりとね」

　おたまを持つ樹葉。そう言われて、俺は樹葉のやろうとしている事に気が付く。なるほど。なんで思いつかなかったのだろうか。

「わ……分かった」

　だが、俺は緊張していた。鍋の中にあけるつもりが、外にぶちまけたら笑うに笑えない。そんな危険性を分かっているのかいないのか、樹葉はさっきからずっとニコニコしっぱなしである。

「い……いくぞ」

「そんな緊張しなくても大丈夫だって」

　額に玉の汗を浮かべている俺をクスクス笑う樹葉だが、これが緊張せずにいられるかっての。

　ゆっくり鍋に注がれるクリームシチュー。一緒に入ろうとする具材を、樹葉はおたまで塞き止めていた。ちょっと量が多いので、いくつかは塞き止めきれなかったものの、やがてホワイトソースはほぼ全て新しい鍋の中に入る。

「よし。こんな感じでいいかな」

　最後に鍋に入ってしまったブロッコリーや人参を選び分けて、樹葉はコクンと頷いた。そして、フライパンを取り出し、具材だけ入っている方の鍋から器用に玉ねぎだけをおたまで掬い、油をひいたフライパンに入れ、火にかけた。

「……慣れてんな」

　ついついそう思った俺は、思わずそう口にする。一瞬固まった樹葉は誤魔化すように咳払いをしたものの、頬が朱に染まっているので、あまり意味は無い。

「ううん……私も経験あるから、ね」

　本人も誤魔化しきれないと思ったのだろう。目を閉じて、観念した様子で口を開いた。

「初めて料理をした時のことなんだけど、カレーを作ろうとして、ロランと同じことしたんだ。しかも、野菜だけじゃなくて、豚肉まで一緒にさ」

「あー……そりゃ、やっちゃったな」

　豚肉は牛肉と違って、ちゃんと火を通さないと食べられない。俺は研修所の家庭科の時間に、それを教科書で見た記憶があるから、その点はちゃんと守っている……ん？

「あれ、でも、お前もそこは知っているはずだよな？　教科書に書いてなかったっけ？　だって俺と同期で同じ年齢ってことは、向こうで家庭科の授業は受けたはずだろ？」

　研修所で受ける授業は、あっちに何年いようが、小学四年生は小学四年生の授業を受ける。だから、樹葉が家庭科の授業を受けているのは間違いないはずだ。

「あー……私もそれを思い出してね。慌てて火を止めて、今みたいに作り直したの」

　恥ずかしそうにそう言った樹葉だが、玉ねぎを炒める手は止まらない。その手際に、俺は感心していた。とても、俺と同年齢とは思えないし、最初に今の俺と同じミスをしたとは思えなかった。飴色に炒めた玉ねぎの香りが体に染み渡る。

「で、その後、ちゃんとレシピを見て作れば良かったなって思った。ロラン達はちゃんと初めからそうしていたのに、私もそうしていれば、もっと早く上達したのかな……あっ、ロラン。次は人参お願い」

　そう言っているところ悪いが、実は俺がレシピを見て作ったのは、初めの数日だけだ。ぶっちゃけ見ながら作るのが面倒くさくなって、そのレシピ本はあっという間に押し入れの奥深くである。

　俺も、あのまま根気強くレシピ本を使って料理をしていれば、こんなミスをしなかったのだろうか？

　おたまで人参をフライパンに入れながらそんなことを考えていた俺は、ふと浮かんだ疑問を口にした。

「なぁ。もしかして、俺が今まで作った料理って……」

「あー……うん。カレーとかは、ちょっと具材が固かったかな？」

「……ですよねー」

　まぁ、この返答は予想していたが。それにしてもショックである。確かに俺も、ちょっと煮込みが足りなかったかなー、なんて思ってはいたが、そもそもそれ以前の問題だったとは。

「でも、ホワイトソースとか、カレールーとかは、ちゃんと美味しかったよ？」

「いや、具材が固けりゃダメだろ……悪いな、今までそんなもん食卓に出して」

「そんなことないよ……これから覚えていけばいいんじゃないかな？　だって私達、自炊をするようになってから、まだ二年でしょ？　あっ、残りの具材、お願い」

　樹葉の言葉に、俺は頷く。これからは、ちゃんとレシピ本を見て料理しよう。あぁ、でも、そうなると押し入れの中から引っ張り出す必要があるのか……なんてことを考えていた時、

「あのさ、ロラン。よかったら、これから料理、教えようか？　レシピ本見ながら作るの、大変でしょ？」

　なんてことを言い出してきた。俺は慌てて首を横に振る。

「えっ？　でも……」

　俺のその反応にちょっと傷ついた様子で、尚も説得しようとしてくる樹葉だが、そんな面倒はかけられない。そもそも、俺が今日、当番でもないのに夕食作りをかってでたのは、おそらく神経をすり減らしている樹葉への申し訳なさと、労る気持ち故である。にも関わらず、こんなところで彼女の負担になるような約束を取り付けてしまっては、意味が無い。

「いいんだよ。俺は独学で、何とかしてみせるから」

「……そっか。分かった。でも、大変だったら言ってね？　力になるから」

　これ以上の説得は無駄だと思ったのだろう。諦めた様子で、そう言うと、残りの工程を終わらせる。

後は、コトコトと煮込むだけで完成なので、俺と樹葉はエプロンをはずす。そういえば、と樹葉が口を開いた。

「ロラン。今日はどうしたの？　確か、当番は私だったよね？」

「……ん？　ああ。お前に謝らないといけないことがあってさ」

　ゴホンと咳払いをして、俺はエプロンをフックにかけた後、テーブルに座る。

「この間は悪かった。お前も頑張っているのに、『任務が～』なんて言っちゃってさ」

「こ……この間……？　あぁ、先週こと？」

どうやら、本人はあまり気にしてなかったらしい。キョトンとした様子で、首を傾げていた。

「ちょっと強く言いすぎたなって。今日それに気が付いてさ。謝らなくちゃな……って、どうした？」

　途端に表情を強ばらせた樹葉。あれ？　俺、また何かやっちゃったかな？

「……えーっと、ああ、そっか。悪いな。そのつもりだったのに、手伝わせてしまって」

「あ、いや……えっとね……ま、まぁ、私は全然気にしてないから、ロランも気にしないでね？」

　これだろうと思う理由だったのだが、結局樹葉の表情は変わらなかった。